

沖縄語首里方言の助詞「ンカイ」「ナカイ」「ニ」「ガ」「カイ」

—— 共通語の助詞「に」「へ」と対照させつつ ——

西 岡 敏

1. はじめに

琉球方言の助詞研究としては、野原三義 1998 [1986] や内間直仁 1994 による各島々各集落の形式と意味を網羅的に集めたものが知られている。野原 1998 では、助詞そのもののみならず文例も豊富に挙げられ、各助詞の系統関係を明らかにしようとする試みもなされている。内間 1994 でも系統を辿る意識は明確で、沖縄の古典『おもろさうし』にあられる助詞が現代琉球方言でどのように息づき残っているかを明らかにしようとしている。『おもろさうし』の助詞については、高橋俊三 1991 の「文法詳論」における格助詞、係助詞、終助詞などの研究がきわめて精緻である。「琉球列島の言語」(『言語学大辞典』所収)における島袋幸子 1996 : 814-829、津波古敏子 1996 : 829-848、狩俣繁久 1996 : 848-863 の各琉球方言の助詞記述も参考になる。

以上に代表されるような琉球方言の助詞に関する先行研究があるなか、この小論ではそうした研究で採り上げられた助詞のごく一部しか扱えないのであるが、焦点を狭めてさらに詳しく扱っていきたい。具体的には共通語の助詞「に」と意味的に相当する形式である。

共通語の助詞「に」の意味に対応する沖縄語首里方言の助詞には、実にさまざまなものがある。以下に、共通語と首里方言を左右に対比させて掲げる。共通語は漢字ひらがな混じりで、首里方言はカタカナで記すことにする(注1)。

| 共通語 | 首里方言 |
|-------------|-----------------|
| 学校に行く。 | ガッコーンカイ イチュン。 |
| その為に行けなかった。 | ウヌタミナカイ イカランタン。 |
| 八時に行きました。 | ハチジニ イチャビタン。 |
| 遊びに行きました。 | アシビーガ イチャビタン。 |

共通語ではすべて同じ助詞「に」であるのに、首里方言では「ンカイ」「ナカイ」「ニ」「ガ」とそれぞれ形式が異なっている。共通語では「に」という一つの形式が、首里方言では意味・機能の違いによってそれぞれ違った形式に分かれているのである。

また、首里方言には「カイ」という共通語の助詞「へ」に近い意味を持った行き先や方向を示す助詞がある。

共通語

学校へ行く。

首里方言

ガッコーカイ イチュン。

この共通語の「へ」と似ている助詞「カイ」についても、共通語を持った「に」に近い意味の助詞「ンカイ」と比較させつつ、共通語との異同を提示したい。この小論の目的は、首里方言における与格あるいは方向格的な助詞の用法について、共通語との対照を念頭に置きつつ、できるだけ正確に記述して提示することである。

2. 助詞「ンカイ」

首里方言の助詞「ンカイ」は、共通語の「に」に相当するとされている。『沖縄語辞典』には次のように記述されている（『沖縄語辞典』はローマ字表記であるが、それをカナにして提示する）。

ンカイ（助）に。ンで終わる語に付く時はそのンをヌに変えて、イン（犬）→イヌンカイ（犬に）のようになる。ただし、ワン（わたし）に付くときはワンニンカイ（わたくしに）となる。キー～ヌブユン。木に登る。ウヤ～イユン。親に言う。シンシー～ウシャガヤビラ。先生にさしあげましょう。シンシー～ウナレー シュン。先生にお習いする。ヤッチー～ヌラーッタン。兄に叱られた。シグトゥ～フィッカタンチョーン。仕事に熱中している。（国立国語研究所〔編〕 1963：435）

このようにほぼ共通語の「に」に相当する「ンカイ」であるが、以下では実際の意味や機能に即して分析・検討を行うこととする。

首里方言の「ンカイ」は、「学校に行く」の「に」（共通語）と同じく、動作の行き先や方向を表わす助詞として使用することができる。以下より、使用可能と判断されて通常使用する文・句には○、使用可能と判断されるが通常使用しない文・句には△、使用不可能と判断された文・句には×をつけて示す。^{（注2）}

学校に行く。

沖縄に渡った。

○ガッコーンカイ イチュン。

○ウチナーンカイ ワタタン。

こっちに來い。

○クマンカイ クー。

首里にいった話。

○スインカイ ウンジャル ハナシ。

首里方言の助詞「ンカイ」は、共通語と同じ形式の助詞「ニ」に、強いて言うならば置き換えられる。しかし、ふだん使用する口語としてはかなりの抵抗感がある。

学校に行く。

△ガッコーニ イチュン。

沖縄に渡った。

△ウチナーニ ワタタン。

こっちに來い。

△クマニ クー。

首里にいった話。

△スイニ ウンジャル ハナシ。

これらの「ニ」は、誤用とは言えないまでも、あまり口語的な表現ではなく、文語的でとてもかたくて古い感じがするという。^(注3) 動作の行き先や方向を表わす場合は、「ニ」よりは「ンカイ」を用いるのが普通である。

また、共通語では受身文における動作主に「に」という助詞が付くが、首里方言ではやはり「ンカイ」という助詞が付く。

太郎は次郎に殴られた。

○タルーヤ ジルーンカイ スグラッタン。

次郎は先生に叱られた。

○ジルーヤ シンシーンカイ ウンデー サッタン。

これら「ンカイ」も、共通語と同じ形式の「ニ」と置き換えることが可能と言えれば可能である。しかし、「ニ」は文語的という意識が強くて実際には殆ど用いられず、「ンカイ」が一般的に用いられる傾向にある。

太郎は次郎に殴られた。

△タルーヤ ジルーニ スグラッタン。

次郎は先生に叱られた。

△ジルーヤ シンシーニ ウンデー サッタン。

動作の方向を表わす助詞「ニ」が、文語的でかたい表現であると感じられているのは、この「ニ」が、ヤマト（日本本土）からの借用された語で、本来的な沖縄の言葉ではないという意識もあると考えられる。たしかに、沖縄語の文芸である「琉歌」には、動作の方向を表わす助詞「ニ」が盛んに出てくるが、これについてはより短い単語の「ニ」（1拍）が、「ンカイ」（3拍）に比べて、別語が入る余地を与えるので短詩型の歌謡には向いていると

ということがあるだろう。方向を表わす助詞として、本来的な沖縄の言葉は「ンカイ」であり、「ニ」はヤマト（日本本土）からの借用であるという意識は話者の中でたしかに強いのである。

3. 「ンカイ」と「カイ」の違い

「ンカイ」と同じく、動作の行き先・方向を表わす助詞として首里方言に「カイ」という形がある。「ン」があるかないかの違いであるが、この「カイ」の意味・機能は、どちらかという共通語の助詞「へ」とよく似ており、共通語の助詞「に」と似ている「ンカイ」とは、別の異なる助詞として扱われるべきものである。『沖縄語辞典』には次のように記述されている。

ーカイ（助）へ。に。目的地を示し場所を表わす語につく。ガッコー～ イチュン。学校へ行く。マー～ イチュガ。どこへ行くか。ジルーター～ イチュン。次郎の家へ行く。

（国立国語研究所〔編〕 1963：301）

『沖縄語辞典』では、意味説明のところで「へ」と「に」の双方に訳されているが、例文ではすべて「へ」と訳されている。

たしかに共通語の「に」と「へ」を考えてみても、大きく意味が重なり合う部分がある。それは首里方言の「ンカイ」と「カイ」でも同じである。

○学校に行く。

○ガッコーンカイ イチュン。

○学校へ行く。

○ガッコーカイ イチュン。

これらの例では、動作の方向（行き着く先・目的地）を表わすということで、ほぼ意味が同じに見える。ところが、次の共通語の例を考えてみると、助詞「に」では言えるが、助詞「へ」では言えない。

○それは学校にある。

×それは学校へある。

すなわち、「に」には存在する場所（ありか）をも表わすことができるが、「へ」にはそういった用法がない。これと同じことが首里方言の「ンカイ」と「カイ」でも言える。す

なわち、「○それは学校にある」「○ウレー ガッコーンカイ アン」は言えるのであるが、「×それは学校へある」という言い方が不可能であるように、「×ウレー ガッコーカイ アン」という言い方もできない。

○それは学校にある。

○ウレー ガッコーンカイ アン。

×それは学校へある。

×ウレー ガッコーカイ アン。

また、受身文の動作主について、共通語の例を考えると、助詞「に」では言えるが、助詞「へ」では言えない。

○太郎は次郎に殴られた。

×太郎は次郎へ殴られた。

これについても同様で、「○太郎は次郎に殴られた」「○タルーヤ ジルーンカイ スグラッタン」とは言えるが、「×太郎は次郎へ殴られた」「×タルーヤ ジルーカイ スグラッタン」とは言えないのである。

○太郎は次郎に殴られた。

○タルーヤ ジルーンカイ スグラッタン。

×太郎は次郎へ殴られた。

×タルーヤ ジルーカイ スグラッタン。

以上においては、首里方言の「カイ」が共通語の「へ」ととても似た意味・機能を持っていることを見た。しかしながら、共通語の助詞「へ」と首里方言の助詞「カイ」とが完全に一致するわけではない。共通語では、次のように連体修飾語を作る場合には「～への」という形を用い、「×～にの」という形は用いない。

○学校への道

×学校にの道

共通語「に」＝首里方言「ンカイ」、共通語「へ」＝首里方言「カイ」という単純な置き換えで考えると、「ガッコーカイヌ ミチ」が言えて、「ガッコーンカイヌ ミチ」が言えないということになるのであるが、事実はその逆で、「×ガッコーカイヌ ミチ」は許されず、「○ガッコーンカイヌ ミチ」と言わねばならない。

×ガッコーカイヌ ミチ（直訳では「○学校への道」）

○ガッコーンカイヌ ミチ（直訳では「×学校にの道」）

こうした連体修飾語（例：学校への道）の場合に、「カイ」ではなく「ンカイ」が使用されることを考えてみると、共通語の助詞「へ」に比べて、首里方言の助詞「カイ」は、さらに用法が狭く限られたものになっている。

4. 助詞「ナカイ」

首里方言の助詞「ナカイ」は、「ンカイ」ほど頻繁には聞かれないが、ときどき耳にすることのできる、共通語の「に」と意味的に重なり合う部分を持った形式である。^{（注4）} 助詞「ナカイ」は多くの部分で助詞「ンカイ」と重なるけれども、部分的には重なり合わない部分も見られる。『沖縄語辞典』には、次のように記述されている。

ーナカイ（助）に。の中に。存在する場所を表わす。シュイ〜 アタル ハナシ。首里にあった話。マー〜ン ネーン クトゥ。どこにもないこと。アマ〜 ウミヌ ミーユン。あっちに海が見える。アマヌ ミチ〜 ユーリーヌ ウンジトータンディサ。あの道におぼけが出たということだ。（国立国語研究所〔編〕 1963：406）

『沖縄語辞典』の例文は、いずれも場所の名詞についている。意味説明に「存在する場所を表わす」とある。たしかに、動作の行き先（目的地）などに助詞「ナカイ」を使用することはできず、そのときは「ンカイ」を使用しなければならない。以下の例文では、「首里に行く」の「に」に対して、助詞「ナカイ」では言えないことを表わしている。以下では「ナカイ」と「ンカイ」を対照させて例文を提示する。

首里にあった話

○スイナカイ アタル ハナシ ^{（注5）}

首里にあった話

○スインカイ アタル ハナシ

首里に行った話

×スイナカイ ウンジャル ハナシ

首里に行った話

○スインカイ ウンジャル ハナシ

しかしながら、「存在する場所」以外においても助詞「ナカイ」が、強いて言うならば使用できそうな場合もある。次の例は、「動作が起こる場所」で、強いて言うならば「ナカ

イ」が使用できる例である。

| | |
|------------|-------------|
| むしろに座りなさい。 | △ムシルナカイ ㊦リ。 |
| むしろに座りなさい。 | ○ムシルンカイ ㊦リ。 |

こうした「動作が起こる場所」を表わす助詞「ナカイ」と助詞「ンカイ」には、微妙なニュアンスの違いがあるようである。

| | |
|-------|---------------|
| 庭に出る。 | ○ナーナカイ ウンジレー。 |
| 庭に出る。 | ○ナーンカイ ウンジレー。 |

双方の例文とも使用可能なのであるが、前者の「ナカイ」を使用した場合、その前に付いている名詞の「ナー」(庭)が、運動場のような広いものに感じられると言う。「ナカイ」の付く名詞には広い空間がイメージされるようである。語源が通じているとは思えないが、「ナカイ」の「ナカ」が「中」と混淆してその意味を連想させるところがあるのかもしれない。

場所を表わす用法以外の助詞「ナカイ」についても挙げておきたい。しばしば耳にするのは、理由の「～ために」を表わす「～タミナカイ」と時間範囲の「～までに」を表す「～マディナカイ」という常套句的な表現である。「～タミナカイ」「～マディナカイ」と言ってもよいし、「～タミニ」「～マディニ」と言ってもよい。「～タミンカイ」「～マディンカイ」という表現もあるが、どちらかというところあまり使用が好まれず、使用不可と判断される場合もある(この「ンカイ」が使用できない詳しい条件については未調査である)。

| | |
|-------------|-------------------------|
| その為に学校に行った。 | ○ウヌタミナカイ ガッコーンカイ ウンジャン。 |
| その為に学校に行った。 | ○ウヌタミニ ガッコーンカイ ウンジャン。 |
| その為に学校に行った。 | △ウヌタミンカイ ガッコーンカイ ウンジャン。 |

| | |
|----------|----------------|
| 七時までに来い。 | ○シチジマディナカイ クー。 |
| 七時までに来い。 | ○シチジマディニ クー。 |
| 七時までに来い。 | ○シチジマディンカイ クー。 |

用事があったために出られなかった。 ○ユージュヌ アタル タミナカイ
ウンジラランタン。

用事があったために出られなかった。 ○ユージュヌ アタル タミニ
ウンジラランタン。

用事があったために出られなかった。 ×ユージュヌ アタル タミンカイ
ウンジラランタン。

日が暮れるまでに戻ってこい。 ○ユーヌ クリユルマディナカイ ムドゥティ
クー。

日が暮れるまでに戻ってこい。 ○ユーヌ クリユルマディニ ムドゥティ クー。

日が暮れるまでに戻ってこい。 ×ユーヌ クリユルマディンカイ ムドゥティ
クー。

また、「読んで、…」 「食べて、…」 など、「～して」を意味する用法（中止的用法）として、「アーニ形」（西岡敏・仲原穂 2000：70）という沖縄語独特の語法がある。たとえば、「読んで、」には「ユマーニ」という形式があるが、この「ユマーニ」の「ニ」の部分「ナカイ」にして「ユマーナカイ」とも言える。「×ユマーンカイ」という言い方はない。

読んで考える。

○ユマーニ カンゲーユン。

読んで考える。

○ユマーナカイ カンゲーユン。

×ユマーンカイ

「ユマーニ」と「ユマーナカイ」の細かなニュアンスの違いは未調査であるが、話者によれば「ユマーニ」よりは「ユマーナカイ」のほうが丁寧な印象を受け、「じっくり読んでから」という意味があるように感じられるという。

5. 動作の時点を表わす助詞「ニ」

総じて共通語の助詞「に」は、首里方言の「ンカイ」と置き換えられることが多い。^(注6) しかしながら、すべてがすべて共通語の「に」が「ンカイ」で置き換えられるわけではない。

「六時に起きた」「五日に行われた」のように、動作が行われた時点を表わす助詞「に」（共通語）がある。これについては首里方言でも助詞「ニ」を用いる（「ニ」が省略される場合もある）。これらを「ンカイ」「ナカイ」で置き換えることはできない。

六時に起きた。

○ルクジニ ウキタン。

×ルクジンカイ

×ルクジナカイ

五日に行われた。

○グニチニ ウクナーッタン。

×グニチンカイ

×グニチナカイ

動作の行われた時点を表わすときには、助詞「ニ」のみ用いることが可能で、「ンカイ」「ナカイ」は使用不可能である。場所の「に」（学校に行く、など）であれ、時間の「に」（七時に行く、など）であれ、共通語では「に」という同じ形式であるが、首里方言では一般的に「ンカイ」（ガッコーンカイ イチュン、など）と「ニ」（シチジニ イチュン、など）といった別々の形式になる。

6. 使用されなくなっている助詞「ナイ」

『沖縄語辞典』には、共通語の助詞「に」と重なる助詞として「ナイ」という語形が挙げられている。

ーナイ（助詞）へ。に。の方へ。の所へ。のそばへ。人・動物を表わす語に付く。アリ～イチュン、彼の所へ行く。イヤー ツィカタル ウヤ～イキ、おまえを遣わした親の所へ行け（夜など、捕えた虫を放す時にいうことば）。

この助詞「ナイ」について首里方言の話者に用法をたずねたが、現在使用せずとのことで、代わりに「～ヌ（～ガ） メーンカイ（メーカイ）」（～の前に、～の前へ）という形を使用するとのことであった。

彼の所に行け。

×アリナイ イキ。

彼の所に行け。

○アリガ メーンカイ イキ。

親の所に行け。

×ウヤナイ イキ。

親の所に行け。

○ウヤヌ メーンカイ イキ。

牛の所に行け。

×ウシナイ イキ。

牛の所に行け。

○ウシヌ メーンカイ イキ。

礎の所に行け。

×イシジナイ イキ。

(もともとあった用法でも×であろう)

礎の所に行け。

○イシジヌ メーンカイ イキ。

7. 行き来の目的を表わす助詞「ガ」

共通語において、たとえば「売りに行く」「遊びに来る」などといった、動詞の連用形に付き、行き来の目的を表わす助詞の「に」がある。この意味の助詞「に」(共通語)は、首里方言では、今までとは全く別の「ガ」という形式によって表現しなければならない(「ガ」が付く前の母音 [i] が伸びる条件については、西岡・仲原 2000:100 参照)。

売りに行く。

○ウイガ イチュン。

遊びに来る。

○アシビーガ チューン。

この「ガ」は、九州方言にも連なるものであるが(野原 1998:50)、すでに『おもろさうし』の段階で表われ(高橋 1991:319-320、内間 1994:216-218、野原 1998:19)、琉球列島の各地で「ガ」以外に、「ギャ」「ガチ」「ニャ」「ナ」「ンガ」「ンディ」などの形式に変化したり派生したりしている(野原 1998:2、内間 1994:216-218)。

8. 最後に

この小論では、共通語では「に」という一つの形式に収まるものが、首里方言ではさまざまな形式に分化していることを見てきた。また、共通語の助詞「に」と意味的に近い部分がある共通語の助詞「へ」もととりあげ、首里方言の助詞「カイ」と共通語の助詞「へ」との異同についても述べてみた。

共通語と琉球方言の助詞を対照させると、多くの興味深い問題が浮かび上がってくる。この小論ではおもに共通語の助詞「に」と首里方言のそれに相当する形式を比べてみたのであるが、助詞「に」だけではなく、助詞「で」に相当するものについても、首里方言のほうが共通語に比べて多くの形式を持っている。また、先行研究でもたびたび力説されているように、琉球方言での主格や属格を表わす助詞「ガ」、助詞「ヌ」および助詞なしの使い分け、提題を表わす助詞「ヤ」(共通語の「は」に相当)の琉球方言的な特徴など、さらに研究を進めていくべき課題は多いが、それらの問題については別の機会に譲りたい。

注

- (注1) カタカナ表記は、首里方言の音韻的な区別を考慮している西岡 2000 のものを使用する。
- (注2) 首里方言の話者として伊狩典子氏 (1931 年生まれ・女性) のご協力を得た。記して感謝申し上げる。
- (注3) 伊狩氏からは「男の人なら使いそうな表現」という回答も得ている。
- (注4) 石垣方言では、場所・時刻を表す助詞「ナンガ」「ナンガリ」に対応する (宮城信勇 2003 : 本文編 707)。
- (注5) 「首里」は『沖縄語辞典』の段階では「シュイ」という発音であるが、伊狩氏の発音では直音化しており「スイ」と発音される。
- (注6) 「～になる」の場合、『沖縄語辞典』の見出し ni に「助詞を使用しない」とある。しかし、伊狩氏の場合、「助詞なし」のときと「ンカイ」を使用するときの双方がみとめられる。

○引用文献

- 内間直仁 1994 『琉球方言助詞と表現の研究』 武蔵野書院
- 狩俣繁久 1996 「琉球列島の言語 (宮古方言)」『言語学大辞典』第4巻 (下-2)
三省堂 : pp. 848-863
- 国立国語研究所 [編] 2001 [1963] 『沖縄語辞典』 財務省印刷局
- 島袋幸子 1996 「琉球列島の言語 (沖縄北部方言)」『言語学大辞典』第4巻 (下-2)
三省堂 : pp. 814-829
- 高橋俊三 1991 『おもろさうしの国語学的研究』 武蔵野書院
- 津波古敏子 1996 「琉球列島の言語 (沖縄中南部方言)」『言語学大辞典』第4巻 (下-2)
三省堂 : pp. 829-848
- 野原三義 1998 [1986] 『新編 琉球方言助詞の研究』 沖縄学研究所
- 西岡敏・仲原穰 2000 『沖縄語の入門 たのしいウチナーグチ』 白水社
- 西岡敏 2000 「沖縄語五十音図と動詞カナ活用表」『沖縄学』4 沖縄学研究所 : pp. 54-68
- 宮城信勇 2003 『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社